

藤谷浩悦著

## 井上雅二と秀の青春 (一八九四—一九〇三)

——明治時代のアジア主義と女子教育

集広舎／2019年1月／472頁／4500円＋税



石田卓生

本書は、井上雅二(旧姓・足立。以下、雅二)、井上秀(以下、秀)という夫婦の日清戦争から日露戦争までの時期の活動に焦点を合わせた評伝である。雅二は清国に関わる活動に携わったことから、いわゆるアジア主義者とされたり、東南アジアや中南米への日本の進出を提唱したことから南進論者とされたりすることもある人物である。秀は日本の女子教育の近代化を推進した教育家で日本女子大学校(現・日本女子大学)の校長を務めた人物である。

次に本書の概要を紹介する。

「序論」において著者は、本書の目的を雅二と秀を通して「日本のアジア主義者の思想と行動」「日本の女子高等教育の展開」「日本と清国、朝鮮、暹羅(タイ)の交流」(p.8)について新たな知見を得るとともに日本とアジア諸国の交流の実態を明らかにすることであるとしている。同時に雅二と秀の青春時代を扱うことによって彼らの思想や活動の形成過程を考えようとしている。

第一部「彷徨の日々(一八九四—一八

九七)」は、雅二と秀の生い立ちから主体的な活動を始める時期の状況を明らかにしようとしている。

雅二と秀は現在の兵庫県丹波市で生まれ育った。二人の結婚は、雅二が海軍志望に挫折して郷里に逼塞し、秀が家名存続のため進学が困難になっていたという状態の中でなされた。それは、雅二にとっては「井上家の家系、財力の自らに及ぼすところに期待した」(p.32)すなわち学資獲得のため、秀にとっては進学を果たすためのものであった。そうして自由を得た二人は自らの道を歩み始める。雅二は荒尾精と出会い、アジアでの活動について感化されると、中国語を学んで台湾に渡ったが、「日本政府の植民地経営の杜撰さ」(p.47)を目の当たりにして「国際情勢など、勉学の必要性をより深く感じ」(p.48)、東京専門学校(現・早稲田大学)に進学する。秀は京都で陽明学者鈴木無隠や天龍寺の橋本峨山に師事しつつ京都府高等女学校(現・京都府立鴨沂高等学校)に進学を果たし、実業家岡岡浅子の知己を得ると、広

岡が支援する成瀬仁蔵の女子大学構想へと関わっていくことになる。

第二部「清国の改革への思い（一八九八）」は、北京で戊戌の政変に出くわした雅二の行動を明らかにするとともに、秀が関わり始めた女子大学設立の動きを清国の女子教育と対照させることを通してアジアの女子教育の流れをとらえようとしている。

雅二は、陸羯南などによって設立された東亜会の一員として戊戌の変法視察のために訪れた北京で戊戌の政変に遭遇した。彼は改革派の王照を救出し、帰国後は戊戌の政変で日本に亡命した康有為や梁啓超などの清国改革派人士と交流する。その後、近衛篤磨を会長とする東亜同文会に加わるが、会内には清国改革派を支援する旧東亜会系会員と支援に消極的な近衛など旧同文会系会員のあつれきがあり、雅二は前者に近かった。

この時期、日本では近代的な女子教育が軌道に乗りつつあり、その流れの中で成瀬仁蔵は女子大学設立に動いていた。清国でも改革派の梁啓超などにより「国家の富強を図るために、人材育成、更に女子教育の必要性」（p.168）が説かれて振興が進められ、「日本の識者の間でも、清国における女子教育の隆盛は看過できない勢い」（p.170）にあった。

第三部「青春の蹉跎（一八九九—一九〇一）」は、雅二が清国改革派支援から遠ざかりヨーロッパに留学する事情と秀が日本女子大学校を開校させた成瀬仁蔵の下で教育者としての道を歩み始める過程を明らかにしようとしている。

雅二は「日本は清国の革命を抑止しつつ、南方の改革派を助勢し、清国の振興

を図り、日本の利権を拡張すべきである」（p.246）とする卒業論文『支那論』で東京専門学校を卒業すると東亜同文会上海支部事務員として現地調査や東亜同文書院の設立活動に従事したが、その後、ウィーンに留学した。

雅二が清国に関わる活動から離れたことには、支援していた唐才常が蜂起に失敗し刑死したことや東亜同文会の方針が清国改革派から距離を置くものに定まり、会内での改革支援派の立場が微妙になったことが影響していた。また、留学先を東ヨーロッパにしたことには、この地域がロシアの勢力伸長によってヨーロッパの火薬庫となりつつあり、「近衛篤磨は、一八九九年来に欧米を周遊してウィーンにも赴き、このことの重要性を見抜き、井上雅二に同地で調査を依頼していた」（p.318）ことが関わっていた。当時、近衛は義和団事件後に満洲地域を占拠して東ヨーロッパから東アジアにわたる版図を拡大し続けようとするロシアに対して日本が強硬姿勢を採ることを主張し、国民同盟会を結成していた。

第四部「再起と実践（一九〇二—一九〇三）」では、雅二の留學生活の実態と日本の女子教育が直面した問題や清国の女子教育が発展していく状況を明らかにしようとしている。

雅二はウィーン大学とベルリン大学で学ぶが座学だけでは満足できず、バルカン半島、ペルシア、ロシアのモスクワやコーカサス、ウクライナ、さらに西ヨーロッパ諸国を巡った。帰国時にはシベリア鉄道を利用してロシアの勢力下に置かれていた満洲も見ている。

この時期、清国の女子教育は日本の影

響を受けていたが、「高等教育の普及よりも、初等教育の拡充、更には幼児教育の普及に重点が置かれた」(p.376)という状況にあった。しかし、日本では女性に対する高等教育が整備されつつあったものの根強い男尊女卑のために「日本の女子教育は、清国の女子教育に影響を与えながら、必ずしも順調な展開を遂げたわけではなかった」(p.377)のだった。秀が学ぶ日本女子大学校でも偏見に因る学生の退学や自殺などの問題が起きると「女子学生の側に一方的責任を負わせる」(p.377)という輿論の圧迫を被っていた。

「結論」では、本書が扱う時期における思索や活動をベースとして、雅二は「南洋」経営へと活動の場を転じ、秀は女子教育家としての活動に専念していったことを確認する。

「物事を観念的に捉えず、実際に現地へ赴き、実態に即して考えた」(p.407)という雅二は、清国改革派支援での挫折の後にヨーロッパ留学で現地の情勢を実見することを通してヨーロッパとアジアを対照させ、その結果、「ヨーロッパを一枚岩に捉えていなければ、もちろんアジアも一つの纏まりとは考えていなかった」(p.407)のだった。彼は「欧米のアジア進出に対抗して、日本がアジアの中心となり、他のアジアの諸国を指導かつ連帯を図ろう」(p.408)と考えていたが、それは単純なアジア対ヨーロッパの二項対立ではなく、日本が「海洋進出、貿易振興」(p.407)するためには「他のヨーロッパ諸国に比べて、日本と類似する側面を持つと捉えていた」(pp.406-407)というロシアとの連携も

含むものであった。しかし、「他のアジア諸国に対して優越感を抱きながら、台湾や韓国で一旗揚げ、一攫千金を図ろうとした」(p.409)という日本人の東アジアでの振る舞いに失望し、後に活動の舞台を「南洋」へと移していくことになる。

秀については、「青春期の人格形成は、京都における「尊皇愛国の精神」、陽明学や禅の影響と結びついていた」(p.410)として、本書が扱った京都時代の重要性を説く。

そして、今後の課題として、雅二の行動範囲が「ウィーン、ベルリンからバルカン、中央アジア、更に中国、韓国を経て台湾、更に東南アジアへと及ぶ」(p.414)というもので、これまでの「国家」と「国民」を単位とした歴史」(p.414)による「歴史研究の枠組み」(p.414)では全体像を捉えることが難しく、新たな枠組みが求められると述べる。また、秀の専門である家政学の日本の女子教育史における位置づけと根底にキリスト教が横たわっている欧米の女子教育の影響下に出発した日本の近代的女子教育が「国家主義的な色彩を強める」(p.414)につれて「アジア諸国にどのように影響を与えたのか」(p.415)を明らかにすべきとする。

以上のような本書において特徴的なのは、リアリティーと多様な視点である。

リアリティーという点について、本書を読みながら思い出したのは、高島俊男『天下之記者——「奇人」山田一郎とその時代』(文春新書、文藝春秋、2008年)と坪内祐三『慶応三年生まれ七人の旋毛曲がり——漱石・外骨・熊楠・露伴・子規・紅葉・緑雨とその時代』(新潮文庫、

新潮社、2011年)<sup>1)</sup>である。前者は山田一郎という明治青年の生涯を丹念に描いている。後者は「慶応三年」(1867)生まれの正岡子規、尾崎紅葉、斎藤緑雨、夏目漱石、南方熊楠、幸田露伴、宮武外骨の生き様を事細かに描いている。ともに日常の些細な事柄も記す詳細さが特徴であるが、それは本書も同様である。

例えば、本書には雅二が「〔1898年〕七月一五日に京都の七条駅で下車、直ちに若王子山中の根津一を訪れ〔中略〕安河内弘と共に九州に向い、佐賀、熊本、福岡、久留米、長崎の友人、知人を訪れ」(p.164)とある。この安河内とは雅二が設立に携わった東亜同文書院で「幹事」や「会計係」「術部講師」を務め<sup>2)</sup>、同院独自の中国語教科書『華語萃編』初集の「著作兼発行者」<sup>3)</sup>として記録されている人物だが、知名度は高くはなく、本書に登場するのもこの件だけで雅二との関係も深くない。しかし、そうであっても雅二に関わる事実であることから本書はこのことを記し、その詳細さによって当時の状況を生々しく再現しているのである。

そうした記述をするために本書では膨大な資料が用いられているが、その中でも雅二の日記は特筆に値する。それは、「これまで近藤邦康先生が唐才常の自立軍蜂起との関連で紹介した以外、殆ど注目も言及もされることはなかった」(p.416)というもので、本格的に用いたのは著者が最初だという。評者はその一部、雅二が京都で荒尾精の教えを受けていた頃の「明治廿八年洛東鹿ヶ谷旧記事全」<sup>4)</sup>と台湾滞在中の「台湾漫遊日記」<sup>5)</sup>を調査したことがあるが、それらは筆跡

にむらがあり判読が難しい箇所が多々あるものであった。そのような資料を精読して細部から全体像を構築する筆致が本書のリアリティーをより強めているのである。

そうした精細さは専門外の読者にとって難解さを感じさせる要因となりうるものだが、「本書の読者としては、西洋史、日本史、東洋史の歴史研究者と同時に、一般の読者を想定している」(p.416)というように、本書は明治時代の日本の様子をうかがわせる一般的な読み物としての性格もそなえている。

もう一つの特徴は、多様な視点からのアプローチである。その中心は夫婦という視点であるが、「井上雅二と秀は別々の個性を持ち、行動したが、相互に影響し合いながら、人格を高めていったことは疑いない。このため、本書では、井上雅二と秀の行動を同時進行的に表わす」(p.18)というように、二人を相対化しながらも夫婦であることに注意して思想や活動をとらえようとしている。

そうした私的な視点からのアプローチは公の活動を追うだけでは見えてこない姿を明らかにしうる。例えば、夏目漱石と森鷗外は近代日本文学の立役者という公の姿がある一方で、私的な視点から見ると漱石は家族に当たる気難し屋の姿が現れ、鷗外は娘を溺愛する姿が浮かぶ。また、大隈重信は、木戸孝允、大久保利通、西郷隆盛について「由来英雄豪傑と云ふものは油絵の如きものである。遠くから眺むると却々立派であり、後世から見ると如何にも英雄豪傑の如く見ゆるものであるが、〔中略〕其時代に同様に相接して居ると、矢張り一個の人間で、

長所もあれば短所もあるのである<sup>6)</sup>と語っている。本書は大隈が述べる油絵的な姿を構成させようとするのではなく、夫婦という私的な関係にも注目することで実像に迫ろうとしているのである。

この夫婦について注意すべきは、彼らが各自の活動分野における第一世代ではないことである。アジア主義方面で活動した雅二は1877年生まれであるが、その活動に関連する主要人物の生年を見ると、荒尾精は1859年、根津一は1860年、近衛篤麿は1862年である。雅二は荒尾、根津、近衛の活動を受け継ぐ世代なのである。秀については、1875年生まれの彼女に対して、支援者広岡浅子は1849年、指導者成瀬仁蔵は1858年の生まれである。広岡や成瀬からすれば秀は後継者の位置にある。

こうしたことに関して本書は、従来の雅二のとらえ方は日清貿易研究所を運営した荒尾精の影響のみが強調されすぎており、「戊戌の政変や中央アジア旅行、「南洋」での活動が、個々の研究者の関心に従って、断片的に取り上げられることはあっても、全貌を解明するまでには至らなかった」(p.13)、秀についても独自性が見過ごされて、日本女子大学校創立者の「成瀬仁蔵との関連から捉えられてきた」(p.13)と指摘し、彼らに影響を及ぼした多様な人間関係の把握に努めようとしている。活動の創始者を考察することは重要に違いないが、活動の持続を可能とする後継者の思想や行動を把握することもまた重要であろう。

本書は、夫婦という関係性に注目しつつ、さらに周辺の人間関係も掘り起こし、雅二のアジア主義者としての姿だけ

ではなく時に酒に溺れながらもなお学業に打ち込もうとする姿や、秀の成瀬仁蔵の弟子としての姿だけではなく儒学を学び参禅する姿などを明らかにすることによって彼らの思想や活動の実態をとらえようとしているのである。

一方で本書には次の問題が見受けられる。

第一に夫婦という関係に注目しながら、彼らの相互影響の実態が十分には明らかにされていない。秀の思想形成について「京都での修業時代、日本女子大学校での学習、アメリカ留学の成果、以上の三点を重要な要素としているが、井上雅二から受けた影響も見逃すこともできない」(p.413)と述べるものの、具体的には示されていないのである。これは秀から雅二への影響についても同様である。

彼らの夫婦関係については、雅二が「真の家庭生活は大正十二年（一九二三年）以後」(p.405)と述べ、秀は1945年から1947年の間に「結構幸福として、二人の生活をいたしました。信頼し抜き生き抜き長い間離れ離れでした私たちが、その時、相寄ったのです」(p.405)と述べている。これらの言葉をそのまま受け取るならば、本書が扱う時期の夫婦仲は必ずしも密接とはいえなくなってしまうのであり、夫婦間の影響の実態について本書は具体的に明らかにする必要があっただろう。

第二に出典表記が不十分である。引用の出典について文献名を挙げるのみで巻次や頁数が記されていない、あるいは何かの事柄を記すに際し根拠となる文献名が挙げられていない箇所があり反証可能性に欠いている。その中でも雅二の日記

は稀覯な資料であることから詳しい紹介がなされるべきだったと考えるが、著者は「井上雅二日記については、本書とは別に、詳細な注釈を付して、一書にまとめ、出版したいと考えている」(p.419)と述べており、その刊行に期待したい。

もちろん以上の問題は、雅二と秀を主たる対象とした最初の評伝である本書の価値を損なわせるものではない。本書は、これまで詳らかではなかった雅二と秀の思想と活動の基層が形成された時期の様子を明らかにしただけでなく、この時期の「日本のアジア主義者の思想と行動」「日本の女子高等教育の展開」「日本と清国、朝鮮、暹羅(タイ)の交流」(p.8)に関心を抱く者に対して、これまで注意されてこなかった雅二と秀という視点からの考察の可能性を示し、今後の研究の発展を促す作用をもつ先駆的な研究成果なのである。

## 注

- 1) 2001年、マガジンハウスより刊行。同年、第17回講談社エッセイ賞受賞。
- 2) 安河内弘は1902年10月から1908年にかけて東亜同文書院に事務職員を務め(松岡恭一・山口昇『日清貿易研究所東亜同文書院沿革史』東亜同文書院学友会、1908年、下編p.105)、大正期には幹事となっている(『東亜同文書院紀要』東亜同文書院、1917年、p.5)。安河内は柔道四段、東亜同文書院の師範役であったという(菊池貞二「蒼茫七十年東方先覚列伝(その五)」『滬友』第18号、滬友会、1965年、p.21)。
- 3) 『華語萃編』初集、東亜同文書院、1917年再版、奥付。
- 4) 「井上雅二関係文書(MF:東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター蔵)、マイクロフィルム第一リール。なお、藤谷は東京大学近代日本法政史料センター所蔵の原本を用いている。
- 5) 同上。
- 6) 松枝保二編『大隈侯昔日譚』報知新聞出版部、1922年、pp.55-56。

中国21 Vol.52 予告 (2020年3月刊行予定)

### 特集 “人際”の「<sup>グァンシー</sup>関係学」

中国的〈関係〉を論じるとき、“guanxi”または「関係」に「グァンシー」とルビを付けて用いるのが一般的になっている。本特集のタイトルはそれに倣い「人間関係」の中国語である“人際関係”をベースにした表記をする。費孝通が水の波紋に喩えた人間関係の“差序格局”(差序的な構造配置)モデルから70数年経ち、今なお有用である一方、中国人の人間関係を語るうえ欠かせない“人情”、“面子”などの概念も“本土研究”において提起される。費氏の「波紋図」を彷彿させる“圈子”という概念もまた、現代中国の社会においては重層的に交差し、より複雑な様相を呈する。

巻頭には2019年3月11日に清華大学で開催された学術論壇の翟学偉、羅家徳両氏による講演を掲載する。【論説】としては、中国的「関係主義」の再考(園田茂人)、中国人の人情と面子(翟学偉)、「自己人」の概念(楊宜音)、地縁関係コミュニケーション(張筱平)、携帯電話の普及と対人関係(周星)、実家・婚家まつわる女性の家庭関係(李霞)、表現の選択についての日中言語対照研究(井上優)などを掲載する予定。どうぞ期待。